

翻刻『狂歌時雨の橋』

石 田 賢 司

ここに翻刻する『狂歌時雨の橋』は、寛保二年（一七四二）十月四日に没した紀海音の追善狂歌集として、彼の娘婿潘山生百子によって編まれ、同年十二月に刊行されたものである。

本書に収められている鳳潭「海音貞峨居士伝」、燈市の手記、百子の序文は既に『紀海音全集』第八巻に伝記資料として翻刻されているが、狂歌集としての本文は未翻刻であった。

海音が狂歌活動を始めるのは、言う迄もなく彼の兄が狂歌作者油煙斎貞柳であったことが大きく影響している。しかし、彼が生涯に詠んだ狂歌は五十首に過ぎず、その多くが貞柳追善のためのものであり、海音が積極的

に狂歌活動を行ったのではないだろう。西島孜哉氏は、海音の狂歌活動は「柳因（貞柳の養子、筆者注）を貞柳の後継者として押し立てようとする意図によるもの」で、「自己を前面に出して中心的な働きをすることなく」、生玉に月並会を持ち『活玉集』を編集したことも、「狂歌檀や俳檀というものから超越的立場にあつて、俳諧師としての余技として、兄貞柳の追善を個人的に営もうとする純粹な意識から発している」ものであると述べられた（「貞峨（海音）の狂歌」、『近世上方狂歌の研究』）。しかし、そのような海音の意図とは別に、かつての貞柳の弟子たちが海音を一門の重鎮として見なしていたと想像できなくもない。海音が法橋に叙せられた

ことを記念して『狂歌戎の鯛』が、追善として『狂歌時雨の橋』が出版されているからである。貞柳の門人たちと海音がどのように関係を持っていたのかを考えるため、まずここに『狂歌時雨の橋』を翻刻する次第である。

【書誌】

底本、京都大学文学研究科図書館頼原文庫蔵本

半紙本1冊、縦二三・〇cm×横一六・九cm

丁数、三十五丁（ただし、裏表紙見返しに書肆田原屋の

広告あり）

外題、「狂歌時雨の橋」（左肩・元題簽）

内題、「狂歌時雨の橋」

柱刻、▲一〇四、上一・二、一〇廿九

匡郭、縦一九・二cm×一三・七cm

行数、序每半丁八行 本文每半丁十行

序、「寛保二年十二月 潘山生百子識」

刊記、「浪花書林 順慶町一丁目筋／田原屋平兵衛梓」

【凡例】

一、漢字の旧字体は適宜現行字体に改めた。

二、合字は現在通行のものに改めた。

三、濁点、句読点を補うことはせず、原文のままとした。

四、各丁の表裏の終わりは丁数と表裏の略号オ・ウを（ ）に入れて示した。漢数字は底本の丁付、アラビア数字は実丁数を示す。

【翻刻】

【翻刻】

海音貞峨居士伝

居士姓者榎並。名貞峨。号海音。摂州之人也。其父貞因者。天資英敏。才思超群。嘗執几杖於松永貞徳之門。以風騷而鳴于世。母永田氏。温而貞矣。嘗夢住吉明神。持白璧一顆来而与之。即有孕焉。以寛文五年辛巳十二月十八日。産于浪華之街。居士生而（▲一〇）魁梧。啼声異常。母教以義方。挾以其友。嬉戲常与綵筆而代璋。卯角自曉張旭之書法。鉄画銀鉤。鳳舞鸞翔。見者奇之。舞勺而入庠塾。師授以孝経。唔咿縦横。不謬句読。弱冠而謁仏日泉。泉示趙州柏樹。雲門須弥之話。而未

契。又賦詩呈華藏源。源擊歎云。不図日本有斯寧馨兒。南岳

悅。奇其（▲一ウ）才。付偈及如意云。參禪學道無余事。只

要平生真実心。侘日若能成法器。舌頭湧出海潮音。爾来以海音

為号。有契沖者。研精万葉。妙而通神。嘗承水戸黃門義公之

命。撰代匠記若干。举世称。定家以来一人也。居士壯歲。執弟

子之礼。而侍臯比者。有年矣。契沖云。邈乎八雲之道。千載之

后。有斯（▲二才）人哉。遂示以玄玄。於是乎。就將以新。

名望日高。其伯貞柳者。以謔歌。声聞于天。可謂伯仲之間。觀

龍鳳矣。居士不事榮利。飲水曲肱。放浪于雲山煙霞之間也。水

無瀬中納言氏孝卿。豔慕其風。往復累年。以至于今矣。頃者

謂。四相遷變。不期晨夕。詩歌風騷。一時戲場而已。老矣。豈

無終焉之計哉。（▲二ウ）且誓斷葷羶。清淨自居。一日隱几喟

然飯寢。即夢住吉明神。三擊其几告曰。汝何欲也。夫道者。一

而已矣。離文字無道。離道無文字。苟離文字。外有道之可求

者。則吾其不知何之謂也。詩以觀。歌以示。豈畜利一己哉。覃

及鄉党。亦然。恍焉覺矣。因視其処。則秋天無雲。過雁杳杳。

於是默契乎道歌（▲三才）一貫。色香中道之理。于詩于歌。

吐露性情。復奚疑乎哉。門人某等。近令画工。描其像。請録其

顛末。以伝於不朽。予以不文辭。堅請不已。遂塞其責云。

享保二十乙卯之冬臘月吉旦

翻刻『狂歌時雨の橋』

洛西松尾華嚴老衲鳳潭書

印

印

（▲三三ウ）

此手記の一篇は先年都より画工を得て師の像を描写せし時乞請し也もとより潭和尚は法橋と遠き縁家にして且老後まで互に因の厚かりければ此賛の事松尾へ申のほしぬるに機嫌よきおりにや有けめ題に書つ、けて戯れの文（▲四才）添え下し給ぬ當時の碩学といひ沙汰世にする処なれば悦にたへす画像にかふらしめしかこ師の形見とは成けりされは此集の中に写し交へ侍りぬ

燈市書（▲四ウ）

されは死は目出たき物也ふた、ひ彼故郷にかへりてはしめもなく終りもなきたのしひを得ると彼長嘯のか、れしも此翁におもひ合せ侍る貞峨常にいへらく我はもうこしに生る、望あり此国はよろつの芸につきても物せはしき也とそ一生誹諧をもて世に鳴りやまと哥は古契沖長流につきて其奥をた（上二五才）つね極め近くは水無瀬の御会毎に勤て哥をさ、く狂哥はもとより兄由縁斎か風をつきて折々毎によみけらしさいつ比門人にす、められて活玉集二卷を撰す享保の末に法橋に叙せられ契因といふ

されは若かりし比は悦山和尚に隨身して舍利寺に住事とし有和尚御遷化（上一五ウ）の後世間僧となりぬやつかりは舅か跡にして久しく万の道習ひぬれとも不様に怠り多くくゆるに所なしことし仲秋の比よりやまふ起りてかんな月の四日おはりをとられける遠近の諸好士よりいたみの連誹或は詩歌の集る事机上に充俳集は仙家の杖と号して別に撰す先は（上一六オ）あつまる所の追善狂哥を梓行し後に雑哥を交る事は前年由縁斎につきて糸の錦餅月夜の二集を撰其作例あれば是らの始終を未練の筆をして自序し侍るも翁かあらましをいはんとて一集の端にしるすのみ

寛保二年十二月

潘山生百子識（上一六ウ）

狂歌時雨の橋

鶯の秀哥のありしをとともに供へて

模稜舎百子

月日星かそえくして八十まで歌で終りしほ、う法橋

ヤッジ

千兵舎可由

初霜のかしらに消へし法橋のかみこづきんやかたみななるらん

雪縁斎一好

法の橋かゝるためしも跡絶て昔なからの噂とそなる

法橋壯年の頃ほひは氣臆の強事いふ斗（二七オ）なし或時鳥羽の恋塚の碑の銘を始めてよみて都に着て友なる人其中の一句をとひ侍るに石面の通を一字もたかへす書渡されしとか

則本太山

山城のとはねはならぬ時々はつれなく消し人を恋塚

三田閑水

此世から請し位も法の橋やすく渡りたまへ彼きし

角井花輔

名は高津色も匂ひも梅か橋跡なき冬も流れたえせぬ

生愚斎二興

（二七ウ）

極楽へ我心底か届高津何とそ返歌給へ法橋

師恩を忘れざるは鳥すらもいはんや人間におゐてをや

玄々閣貞見

聞請しひとくくをけふよりは妙法橋ととなへこそすれ

一七日

百喜堂貞史

題目の文字の数に日も立ば妙蓮台に嚙のりの橋

清潮院海音日法居士へ今はむかしちる紅葉をとありし秀

哥を思ひ出て

才眷斎青紙

和歌誹諧連歌の三ツをよそにしてをしや弘誓の船にのりの名

(二八才)

他国之部

尾州名護屋 楊柳斎米都

油煙斎のおもかけと見し人さへもともに煙と聞そけふたき

先師貞柳翁の後室も此折節身まかり給ふと百子より告らるゝに付此集の序に詠侍る

おくれても夫婦は二世の契なればひとつ蓮の花嫁じやあろ

同 狂裏山其梅

是よりは哥のよしあし聞人も枯て難波のうらめしや扱

同 二橋

鶯をしむ難波の梅法師塚にむかつて冬も鳴らん (二八ウ)

同 柳華斎宣千

燈にあらねと是も由縁斎の面影法師消てはかなき

同 文煥堂琴詩

法の橋只長かれと思ひしに朽果しとはおしやぎぼうし

同 松夕庵有琴

疑ひもなしに仏にならしやろふ神の御留主の死出の旅路は

同 蟠霜舎其律

是ばかり偽りになれ神無月袖に涙のしくれ降とも

現世の果を見てといふ事を

同 石流長

在時^{イマツキ}ていかよければ未来記も御法の橋を越ん哥占 (三九才)

同 湖月堂可吟

法橋の花の袖笠やれ果て泪のしくれ何とふせかん

美濃関 三休斎白櫛

花の木をもてざれ哥を手向はや硯の海の音に聞人

月の翁とともに其名の世に照しも

備前岡山 司喉

月と、もに其名高雄の秋もはや冬のていかと散てはかなき

同 一仕

おほ空の月に待れて行ていか見ぬ事ならみるやうにこざる

同 有皮 (三九ウ)

哥人もかりの宿りを終に出て行とはおしや時雨の珍物

住吉 哥縁斎貞堂

火を元へかへす間に湯わかして水になしたる人ぞ悲しき

辞世とおほしき詩有 平野庄風知

一生に哥誹諧を食として末期まで詩は菜^{サイ}好み哉

先師由縁斎の寂せられし時へしるしらぬ人を狂哥に笑は

せし其返報にないて給はれとよまれしを思ひ出て

芸州広嶋 芥川貞佐

笑はせし其枝さへも枯にけり狂哥人達泣てたまはれ (四10オ)

高津法橋くといひしも

浪華 思斗亭友房

ゆかうづと掛ておかれし法の橋心しづかに妙の台へ (四10ウ)

四季の哥新古混雜

春の哥

松永貞徳

天の原ふり酒入て見る鍋にかん過てこそ霞立けれ

十月百子可親同道にて岩屋の紅葉見んと出立けるにいと

ふ風立ければ道より立かへりて

由縁斎貞柳

紅葉狩あまり寒さに引返しこれ餅三つ買て喰けり

友のかり行けるに鯉を切て出しければ

法橋 貞峨

扱御手にいり酒の鯉やのぼるらん其細作り滝の糸筋 (五11オ)

春

千兵舎可由

難波津のみつのうらへ鞍馬よりはるくきぬるけさの大福

下部等か雑煮の味噌を摺くもれん木正しせあらたまる春

十日戎の初市に紙細工のゑはしの例年よく売ければ

誰がきてもゑはしや殿が右左いちのかしらと見ゆる也けり

住吉浄土寺の花を

散ぬれば又咲も有浄土寺の花にいろく不動明王

鷺の尾山のさくら見にまかりて東には(五11ウ) くらか

り峠も近く見えたり

呑諷へ一寸先はくらかりと花の詠にさはぐ鷺の尾

同麓にて

桜ちる此下陰の寒からぬは空にしられぬ程酒や呑けん

都の花見んと案内せられて

地主御室都の花の西東みな見にけりや北野わたりも

七夕

鵲の渡せる橋をべらくと牛に年日の夜や文ぬらん

此夜寺子屋へ招かれて踊の狂歌をと有に

おぐる者久しからずを引替て踊る物こそ久しかりけれ (六12オ)

名月 待宵は雨なりければ

待宵のふりにし空を引替てはれ堀出しな芋の名月

二千里の浪間の舩も照渡り底さへ見ゆる三五珠の月

住吉宝の市に詣一の戎にて升を求めて

升もつて忝しや御戎の宝の一をうけて三帛

梅の尾にまいりて童どもの落葉搔をみて

いろ葉かく娘子供の手ふりまで京のあたりはしほらしき哉

年尾 節分

節分に鬼はなきそよ我宿に福もこもれり徳もこもれり

年の尾は春の来るので嬉しけれけれとも／＼せはしけれとも

(六十二ウ)

月見れは世事に物こそ世話しけれ今年斗のくれにはあらねと

鹿嶋屋何某の元へ入聲の来られしにいとふ石打しとて立

腹有ける挨拶に

打石も鹿嶋やなれは聲殿が動かぬやうでござりや申^ス

閑水子より初ひの賀の摺物を送られし返しに

年明て三番早々御摺物舞はしめに渡^ス千歳

寄松恋

文やれとにちやらくちやらと手にもふれすやとき人をまつそきのとく

寄竹子々

あふ度にぽんとさゝれて竹の子の根の有事か堀て聞たや

(七十三オ)

寄糸瓜恋

へちまともおしからさりし命さへ長くもかなと今にぶら／＼

寄筆々

命毛も今は絶なんと一筆にちくつを詰てかき口説けり

翻刻『狂歌時雨の橋』

若衆を恋

箱入の御若衆様に打込ておらは鼓のどふしてよかるぞ

御若衆が真実あふてくたさるか取も直さず情しり也

月夜の惣嫁をよめる

人目さへさふかとおもふ春の夜の朧月夜にしくものはなし

鴈金文七の淨るり去年の秋より大はやり(七十三ウ)して

春の末新淨るりに替ると聞て

文月の空より出る鴈かねも春をこし路にかへる也けり

鴻池元信四十二にて身まかり給ひしを

四十二のやく束事といひなから深くおしきは鴻池殿

夏からしを粉にして売を見て

^{スギツツ}業は草の種なる唐からし粉にして売はからき世渡り

喜兵衛といへる水汲頓死しければ

きのふ迄生て働く水汲の喜兵へてはかなく成にけるかは

生玉へ生花の会にまかりて

生筒は皆是珍花一日のけふなげ入に生玉の春(八十四オ)

此度天満宮の絵馬堂あらたに建て色々の大絵馬二間に八

尺三間物始一間なるを小とす見物に憂を忘るゝ人多し

南無天満大事／＼と我一にかけ奉る絵馬の数／＼

参宮せし時所々にてつばやきけるを家土産にせしを爰に

翻刻『狂歌時雨の橋』

一一六

記ス

大津奴茶屋

大津絵や道の詠を題笠に奴茶やから振出して行

草津

喰付て放れかたなき名物は姥かもちろのおもきゆへかも

(八四ウ)

横田川水かさ増けるとて渡しを

濁りてはおのか名迄も横田川渡し賃をせんと取ける

水口

みな口へまいりて見れば一盃か五文と衆の鯨汁かな

蟹か坂

横這にのほり上ればかにか坂穴しんとやとあわせ吹ける

関の宿は酒屋善兵衛常宿也ければ

いつとても馳走ほさつを吞ぬるは関の酒やにしくはこさらぬ

松坂を

松坂を越ぬこなたの茶みせて馬の太鼓のおかしかりけり

(九五オ)

榎田よしやといふ茶女によめる

髪かたちいふに云はれぬ言の葉はさすか榎田の者よしやよし

明星大和屋といへるにあまたの中お千代お長といふ二人

わきて美しかりける

明星で能いと名取のふたつ星ひとりはおちよ暁の空

伊勢合羽赤きたはこ入は水に入てもしめりなき名物と聞て

千早振かみの合羽のたはこ入扱くななるか水はちくとは

宮川をわたりて

宮川の深きめくみの寄進船おあしたすかり渡りこそすれ

(九十五ウ)

相の山

宮めぐり摺やさゝらのでんちうじや張ひぢしたか銭をまけやれ

哥比丘尼

かりそめに難波で聞ば貫といふいせの比丘尼の安き一ふし

刃物をあやとる銭もらひに

きれ物と銭もやらすの見物は刀のさやのぬけ参りかな

宇治はし

宇治橋の下から銭をすくふとはようあみ出したものである哉

参宮

天照しますくかみの御恵を笠に着てゐる天か下かな (十十六オ)

神明の恵に相の山こえて大御神樂にあふそ嬉しき

吾妻に下りし時旅宿の名月に

珍らしと御江戸盃引受て楽しみ深き武蔵の、月

東比丘尼の居所を尋て

喜撰法師いや比丘にんの住庵は御江戸の辰巳と人はいふ也

菊の節句も江戸に有札者の巖を見て

屋敷から袴の町の上下も折目正しき丁陽の札

まりこ川にて

かたふきし日足も爰はまりこ川暮に数行道の程哉

さよの中山にて

(十十六ウ)

つくく〜と此鐘の故事聞からに諸行むしやうにはしく成けり

生愚斎一興歌

年内立春 風呂によせて申侍る

入人のむめよ〜と戸敲くは風呂の内にも春や来つらん

元日の鯨を

頼朝の鶴にはあらで初鯨それは金札これは銀札

若菜

我が読し三十一文字の言の葉にあへ物と成若菜也けり

藤

名におひて数寄する人はひと方にふくさとも見る藤の花哉

(十一十七オ)

洛安井御門跡の杜若を見て

価あらはかほよ花とおもほゆれ爰は所も安井門前

翻刻『狂歌時雨の橋』

蛭

草村に蛭君子の道そとは知たりかくたり買たり取たり

五月雨の比友の方にて素麵出ければ

五月雨の淋しさに出る素麵を二皿三皿つゆ〜と喰た

七夕

七夕にさし汲かはす賑しさいつもかやうにあらまほし合

織姫にこよひあふ瀬と聞からにあやかり物や耳を彦星

かるたを

(十一十七ウ)

ほの〜と夜あかしに読客達か哥にはあらで錢をしぞ思ふ

青測を

御酒もなる雷の神是也きとろ〜とたと喰ふにも

洛金閣寺にて

さしかゝり爰そ将棋の金閣寺駒つなきにて休らひそする

年の暮に寒箸を貰て

せいほとてせんたんの木橋の太工から二葉より猶かん箸かきた

かけ乞の酒に酔しを見て

一時に三里掛を呑過しかみつかふなるいぬのくれかな

他国の部

(十二十八オ)

備前岡山 司喉

花見に人の誘へとも行ずして吝き人に

二七

野遊びも道の苦といふしはんほはこかね花咲銭箱の内

灌仏

御誕生産湯の風やめされけん見るにひたりの落る花汁

真桑瓜

むまいとて常には夏の真桑瓜先たべ物の一かしら設

杏子

すいといふむまみをもつて世に鳴はあんすとやらん里の言の葉

七夕

(十二18ウ)

天の河深うはならぬ盃も玉のてうしにほし合の空

文月

秋の返し遅かりければ

送れとも返り事なき文月は早秋風のけしきなるかも

冬枯の庵

一盛り花に遊びし此庵も冬の来ぬれはのらもかれく

西大寺観音へ参に連の遅かりければ

大善大悲ちかひ三里の道なるにどふなされてやゆるり観音

厳嶋へまかりし時おんとの瀬戸にて

踊やうにおんどの瀬戸を越船は波の鼓をはやしかたにて

或方の腰元女房成り有ければ

(十三19オ)

氏無うてつい奥様になりふりも乗よく見ゆる玉のこしもと

或人遊里に通ひ身をゆたねしと聞て

恋衣露の命の洗濯ものり過してはこはいものかな

久しふりに来し人の蛤持参しければ

蛤のたまく逢しかひ有て恨しむねもすみよしの浜

播州の人の帰帆を名残りて

高砂のうらなく語あかせしにけふはさらばの声を帆に上

薪問屋何かしは人柄よしとてほめければ

皆人の伽羅とほめぬる仁なれば何百艘か木船賑ふ

網浜村念仏宗の一庵にて

(十三19ウ)

鱗もすくひとられん此庵の所作を聞にも南無あみの浜

夏の頃去方の十三回忌に十三仏の絵懸りければ

時鳥其なき跡をかそふれば十三仏の本尊かけたか

矢師何某追善

的中の葉の切も立ずして閑きみつはのそれ矢悲しき

柳に遊女書し絵に

色も香もまだ青柳の新ぞうは風に任せて振気力なし

仁尾屋何かし息女婚礼の席牡丹の看台によりて

にはやかな色深見草時を得て富貴に開く花のふり袖 (十四20オ)

寄掛絵恋

君にもし心掛絵か顕れて腹一文字に切らふともま、

寄餅恋

あたゝかな我に一はいくわせしはつめたき君か心もちかな

同所 有皮

岩田氏の方へ春の初会にまかりて

井の内の蛙も春は這出て岩田にけふの哥の口明々

同席に春雨ふりければ

しつほりとふる言のはの潤ひて笑い草く生る春雨

由縁斎の狂哥の一軸に (十四20ウ)

筆の跡画る、柳の紙表具げにも妙なるのりかげん哉

水無月の頃又久しふりの参会に

みな月の御願によりて我々も久しふりにて哥の虫干

後の月

詠にも昔の哥の種時て豆名月のさやかなる空

寄蒲鉾恋

かまぼこのいたくおもへは夜は猶日に幾度か身もこがれつゝ、

寄多葉粉恋

恨侘たゝかれてうき灰吹の吸からしとは恋のぼんとく

寄円座恋 (十五21オ)

我恋はいつそそもしの居所にしかれてなりとゑんさ有たや

同所 娛春斎浴風子

紀行の内

翻刻『狂歌時雨の橋』

大江山幾野、茶屋に腰を掛先田楽をたいらげそする

柳

春風か柳の面吹からにはを出してやいともゑむらん

牛をよめる 同所 一洞軒吐雲

足よはの車を待て手を引つ背に大津の旅は猶うし

狸々舞

磯際へよろく、芦の笛を吹浪の鼓のどとたをれて (十五21ウ)

花 同所 雖学軒不巧

佐保姫の伽羅や炷けん香ひさへひとしほかまのはなのあたりに

灼夕

山々の紅葉も今はちらし文猶く淋しき秋の夕くれ

春雨 同所 上野氏祐茂

如月や詠にあかぬ野辺の景ふるは泪と誰かいひしそや

傘

黒雲にかみなりさはぎさし出るは鬼にはあらず大蛇の目一つ

駅路歳旦 同所 鋸屑堂万子

年越も旅の空にてするかなる富士は蓬萊門松は三保 (十六22オ)

土筆

野べもはや霞の衣きて見れば皆一面に法師なりけり

春雨 同所 鉄壁堂鬼丸

しつほりとふり出すははや面白やおもしろやつこの此春の雨

番椒に寄て恋の心を

からき目にあふて夜毎にかよふ身をせめて一度はちきり給はれ

寄数珠恋 同所

推月堂狂夫

御情をいのる念ひの数の玉さら／＼文に寝られさりけり

寄蛸釈教

此糸の衣にもよくにられたる蛸まないたにのりの道かな

寄硯神祇

同所

古市氏松栄

(十六22ウ)

箱の蓋明て硯のうなばらにあらはれ出し墨よしの神

寄手鞠恋

我恋に落させたまへてまりこの十ッひいふうからおもひつく／＼

常に酒を過す人を諫

美濃関

三休斎白掬

月も酒もいつれ武蔵野盃にみつれはかくる過し給ひそ

糸桜を見侍りて是を折句にして身の上を詠る

いつも只としにも恥ずさはく身は苦も苦ならねは楽な浮世じや

家号伊勢やといふ人家を住替られしを

家の名の伊勢屋といへは神風の爰にもふくや徳の来りて

(十七23オ)

三井寺の景をかける扇に書付ける

入相の鐘つく坊に酒くれて酔はせておいて花を三井寺

谷川に魚のあそふを見て

濁りにもすめば都と聞つるに爰は流れも清き川魚

金山屋文助といふ人家求て向町へ移られしを

文と読小判の字其儘に移るや爰も佐渡の金山

或所の団に極楽の外ならばこそあつからめうちは涼し

き夕くれの空と有しを見て其うらに書付侍る

内外のさかいにのりの道有て丸き団の神風そふく

(十七23ウ)

先年上京の頃道中にて風雨にあひて田村川の水かさ増り

ければ

尾州名護屋 楊柳斎米都

君か代に鬼はなけれど田村川俄の雨に水出こはさよ

桐油に包れ駕の内に濡しはたれて

旅衣只身を捨て土山に雨ふらはふれ風ひかばひけ

又山坂にてかこかきの声を聞て

遠近の此山_ン中の山におほつかなくも呼ふはかごやろ

都に出て祇園の花を

いつくはあれと祇園の花の盛には心してふけ山おろちの風

(十八24オ)

清水花

一枝は折もせふかと花に問ふ地主のゆるしのありやなしやと

御室の花

下戸上戸顔に麴の花に幕実も御室の内そのどけき

嶋原柳

女客嫌ふは爰も高の山いはくはどふ蛇柳にとはゞや

京を立出るにゆかりの人々見送り別るゝとて

手拭をかけて袂のせばければ別れの涙つゝまれもせず

夫より浪花に下り貞峨庵へ訪て狂歌など聞て

哥のさま紀のつらゆきか有常か上下ともにていがよければ

(十八24ウ)

上巳

花桶に桃や柳をさしまして雛の都ぞ錦なりける

雛見んと童の来り調度なんと取ちらしければ

雛みんとむれつゝ人の来るのみそあたら節句のせわにそ有ける

楊柳斎より譲られし貞翁の自筆を表具して

柳華斎宣千

され哥の風袋代々伝れは其御札に表具いたした

将棋に勝てまた手に金銀の残りければ

角はかりつまり果ぬる時たにも将棋なればそ金銀も持ッ

翻刻『狂歌時雨の橋』

又玄斎佐風子に桑名蛤にて酒すゝめ(十九25オ)ければ

佐風子のよめる

貝の口あふた同士の咄しには酒も苦はなし桑名はまくり

かへし

手つがひもぐりはまなりし馳走ぶり構ぬ客は亭主くはなや

母の十七年忌に

追善にせめての恩を送らんと腰折哥を詠て手向る

母の在世に持給ふ数珠とて贈られしを見るも悲しく

宣千妹色女

奉る哥よりも先うかみけり泪は数珠の玉の数ゝ

三弦のどうに淡路嶋書たるに

(十九25ウ)

同所

琴詩

三味線の調子は嘸やあはし嶋幾夜寢覚の友とひくらん

六十の賀を祝して

今年より腰に梓の弓のあればよつびき丁と八千代いさしやれ

朝日山といふ名茶を貰ひて

風味よし花香は殊に朝日山立のほりたる御茶なれやさて

春夕

同所

二橋

入相の鐘聞度に春は只花やちるらんとおしみこそすれ

涅槃会

翻刻『狂歌時雨の橋』

三二一

入滅の形見分かや御寺から里へも暮るゝ入相の鐘 (廿26才)

年内立春 同所 蟠霜舎其律

餅花を梅と見たやら年の内に一はい喰ふて春は来にけり

歳旦

山鳥のそれにはあらて神棚へ今朝ははつをの鏡備ふる

梅柳筍早奥

春柳の鞭打春の先陣におくれし物とさきかける梅

八月十五夜

酒吞て詠た春の花よりもだんこに似たる秋のもち月

秋野

糸薄関羽か髭の秋の野の萩の錦に包れて見ゆ (廿26ウ)

せいはい

虫強い高野の人も那智人も年の尻にはこまりぬるかな

足の腫物見廻とてあやめを給りし人の元へ

もらふては何より増るあやめ草我はちんばを引ぞわづらふ

瑞宝寺唯誉上人七回忌香奉るとて

俗の身のとらやあゝは得よまねはせめて一炷^{*}南無伽羅手向ん

寄名所恋

目てしらす恋の山吹それそとはいはぬ色にも井出の玉川

天満宮奉納

手向には何かおしまん梅の花あゝ鶯にしからるゝとも

寄団神祇 同所 石流長

瑞籬のうちはたふときやまと竹あふけは涼し神風ぞ吹

無常

戸をさゝぬ御代も無常の風あらく障子の道ははつされぬなり

太鼓に名を得し人の来りければ

壁に馬を乗付たやうな無心じやが豆煎てかましきに太鼓うたしやれ

江戸へ初て下る人に馬の餞とて馬のたすけをなん送ると

て糸の紫なりければ

東路の旅のたすけにならすともくれないよりはましと見給へ

漆屋の始の婚礼有ければ (廿一27ウ)

同所 湖月堂可吟

幾千代も契は堅地玉くしげふたり中よふぬるそ嬉しき

春 住吉 哥縁齋貞堂

しはんぼが始末の始日の初一もんおしみの百になるまで

としのくれ

行年の箱根八里は馬て越師走の峠かねのわらんず

花見にまかりて

下戸の身をあはれと思へ山桜花のあたりに餅やはない哉

彼岸の遊山

押寄る彼岸桜の花軍多勢に無勢負し弁当

(廿二才)

汐干

出て行跡は單の塩干かたにじらぬ物は猫はかりなり

竹の子

かしこくも爰迄おじやれ藪垣の隣七賢はへる竹の子

夕立の雨やとりの人をもてなして

夕立に茶を汲出して酒もつて傘借^ゑは油虫かも

住吉蓮を見にまかりしに散果ければ

散たともしらぬが仏蓮の花に先乗らぬやうに願ひこそすれ

躍

笹ならてきりこにしてを切かけて氣違ひ水によいやこのく

(廿二才ウ)

名月

手を請て待た程有うもござる其もち月を爰へ下され

貞堂は餅の哥を度々読と悪口せし人へ

貞堂か口を放れぬ餅の哥ついに一度ものどに詰らず

薬師風呂初湯の賀

薬師湯へはだか参の女中達かはらけもあり開帳もあり

同

翻刻『狂歌時雨の橋』

七人の敵もあらざる男風呂ぬき身にけがのないぞめでたき

中村氏子息袴着に

そたちから長い刀もさしもくさゑもぎにはる、麻袴かな

(廿三才ウ)

嘉昌子に息女誕生の祝

聾人を頼て祝んさゞれ石のいはほにこけの娘御誕生

上つかた御通にて掃除の節尋ね来し人に

下戸の家へたまの御出の玉はゞき餅さへけふははきちぎりぬる

天神前大医半井養節老追善

天神もさこそおしませ給ふらめ梅干に成てもござればよいに

平田氏一周忌

ごま塩をひたいにかけて送りしもけふは茶の子と成しむかはり

半井氏の一周忌法事狂歌をと望れて

膳はいそけあく迄喰ふも氣の薬跡腹やめぬいしや殿のひじ

(廿三才ウ)

名所残雪

吞^くは明石のまねは須磨の浦山にふり残したる雪の面白

去御方にて御菓子給り秀句をと有ければ

御菓子の身にあまりにし東山峰の松風みどり落すな

津間君へ御目見

御ゆるしの有て是迄高上り雲雀骨なる此親父めが

同御盆

御情の雫もならぬ下戸の身が餅に増りてねぢちきる程

法橋より狂哥の添削をゆるされし時賀を給る人々へ

こつまぎぬ俄にとぼし八方へ四方髪にて御札申さん（廿四30才）

浪花

思斗亭友房

丹州亀山正誓寺の庭の花盛に終日御饗応の上狂哥をと望
まれて

寺の庭寿妙無量の糸さくら和讃に馴てろく地引する

稲荷山の紅葉を見て

初時雨狐色にそ染なせるいなりの山の薄紅葉かな

と、は山へ柴刈にかゝは京へ売に出る八瀬の世わたりを

見て

かしらには重き世渡り見ゆれとも身はかるさんの八瀬女哉

女の衣洗ふ体を書く絵に

（廿四30ウ）

久米の仙人か落たもことほりやうそよこれたるきぬも洗へば

紙子姿の人形の絵に

まふくるもつかふも同しかねなれと有かなきかの世に住ばかり

中村富士郎誹名慶子是へ扇の絵をたのみつかはすとて

たのむそよ中むらさきの筆すさみひかるけいしへ絵書てたまはれ

年尾

長き日もかさねてくゝり有ゆへに年の尾とてもむすばれもせず

（廿五31才）

百子哥

年のはしめに

打揃ひ祝ふ雑煮のふとはしら神をもちゐる国の初朝

吉野山知足院の御方よりことしは我山にこの館より恵方
にあたり侍との文の返しの端に

みよしの、恵方にあたる御文は猶々ゝ花の春かな

花

幕で吞人は年々替れとも花と酒とは相似たりけり

まだけといふ竹のこを給りしもとへ

こはいとは浮世の口のさが竹のこみつちやあれば味はだいご味

（廿五31ウ）

くらはし山といふ所に郭公の鳴と聞て人々まかりしに扱

鳴さりければ

なきおらざくらはせ山の時鳥棒にはふらじけふの趣向を

月見の肴に数の子を出されければ

はやゝと三五のけふの御肴是はにしんが八月の子哉

年暮 年越正月十日なりければ

年越は先十日までいひ延しこわふはないぞ老のかけこひ

雑

老ては絵こそたのしけれ書習へといふ人に

絵の事はしらがを後と聞ぬれと五十の髪にいかがいさしいき

(廿六32才)

芳澤菖蒲誹名春水会の目見へて折ふし在郷より遠出ので
つちに茶をはこばすとて

足手は虎かしらは赤し去程にあやめのまへへ出すはふゑんりよ
木端御坊初てたつね来り給ひて

折ふしによ^{ハキ}う金玉を吐たまふほうきや町のゑもいへぬ人
返し

箒屋町に住候へどあくた口ほこりの立をいかい御ほうび

鞆をよくける人の近頃やめられければ

あたらずとまりにけりなきのふけふ人の心のあすかい川哉

小ちよくを十^ツ家来の破ければ (廿六32ウ)

ちよく破れはいともかなし^{ハキ}そうめんの汁はととはい^{ハキ}か答へん

富士の牧狩の絵に

去間頼朝とのあたまから大きな遊び舌をまきがり

達磨尊の髭をかふろのぬくざれ絵に

ぬく髭の数もひにふに達磨との夜^{ハキ}昼かぶろがなふり通して

翻刻『狂歌時雨の橋』

不動尊に芸子の絵

南方で一切^リ買たりやしや明王其御顔ては色なしの君

樊噲に惣嫁の絵

鴻門の会宿りならあそばんせ今日本から出かけじや〜

大名に取上ば^{ハキ}の絵

(廿七33才)

ゑなの後洗ふてみれば中々に是はかくれもない大名のたね

山伐にお福の絵

もろこしの都恋しきと、さんも有山伐とのに嫌はるゝ身は

法楽寺の開帳に縁起よくする僧の有ければ

口まめに肝煎僧の法楽寺一ぱいしゆせうさ錢はぐはら〜

蔵へ雷の落けるを

鍵のやうにびら〜光ると見へけるがくらばら〜あきれ果けり

浄土宗の僧法花宗を打ける談義に

堅いのを打やはらげる法の庭互の胸をせんだくなるらん

日夜碁を好人の弟に又よくかせぐ人あり (廿七33ウ)

かねまふけ凡三百六十日さて黑白の碁兄弟かな

鷺仁左衛門同権之丞浪華にて狂言尽しありけり甚繁昌棧

敷さへなかりければ

わらんべのいふも狂言^{キギヨ}綺語なれや跡程大入鷺にや尾か有

素読おしへける童子に素廻くはせて

三五

よき程にからみなど請たる所ぞうめんゑいちの児にそ有ける

古き奈良風炉を求めるに風よしと人々はめければ

数寄じやおしやれど何もなら風炉のたぎらぬ手まへ恥しや茶て

出入の男来り物思ひの事有なといふを酒のませて

酒は是うれいを払ふほうきや町なれどもそこへはいてたもんな

(廿八34オ)

市川團十郎戌の顔見せに浪花へ上りけるか病つきて江戸

へ下りむなしく成けると聞て

荒事の其ぬり顔を見るやうで海老蔵もか、かなしかるらん

折々女夫喧嘩せる人へ

中のよくせに折々つかみ合ひとんとこけたか恋路なるらん

去方より地獄によせて恋の哥よめと仰事ありて十首よみ

待る中に

くどくのをあほうらせつと嫌ひ切やせさせをるはしはいがき哉

落しては人の見る目もかぐはなも本に地獄のかまはざりけり

去ふとはよつほどあつい虎の皮ふんとししめて物をいはしやれ

(廿八34ウ)

寄蜚恋

黒焼にもならず恋路に嫌はれてとかき其身の青さうらみん

寄鱧恋

さかれたる身はずだ／＼に成とても追かけ行かんかまほこの道

寄鮓恋

なれ初て今は御中也雀鮓喰さかされし名こそおしけれ

寄酒恋

てうし切くといて見はや押へたらあいと答へて一つなる口

寄狛犬恋

狛犬は女夫なからかちゞみ髪むすぶの髪のかはしめかも

(廿九35オ)

或禪院にてそは切を出し給ひければ

もふす／＼いかなるか此あんばいは御手打じやとはさとりましたぞ

南都の哥よみ浪花へ会に下り犬にくはれしと聞て

青によし奈良の哥人も足引のやまひ犬にはかたれざりけん

舅法橋より誹諧の奥旨はのこらす伝へ哥のはしくれも聞

まほしといへどもきかずある日わざ／＼使来りて一卷を

得たりければ則

秘事じやとはいな仰鳥とこひ／＼てけふ呼子鳥百子嬉しき

順慶町一丁目筋

浪花書林

田原屋平兵衛梓

(廿九35ウ)

狂歌誹書目録		田原抱玉軒粹	
後撰夷曲集	古人の狂哥 并狂哥式全七冊	絵発句橋の屑	木沢藤角集 全二冊
同 拔書	右の内達人の哥 撰出ス附録貞柳哥	同 蛙囊集	同断 全二冊
拾遺夷曲集	近刻	画賛輯	豊津蒲丈集 全二冊
狂哥置みやけ	由縁斎貞柳哥	画発句逍遙集	柳原社笛集 全二冊
同 机の塵	同断		
同 時雨の橋	百子堂潘山	誹諧和国車	折句集全
同 猫筑波	同断	同 蟬の下	同断 全
同 猿筑波	同断近刻		

(裏表紙見返し)

〈付記〉

貴重な資料の翻刻をお許し下さいました京都大学文学研究科
図書館に心よりお礼申し上げます。

(いしだ けんじ・関西学院大学大学院文学研究科研究員)